告　辞

本日、東京農工大学の大学院を修了された皆さん、おめでとうございます。東京農工大学の教職員を代表して心よりお祝いを申し上げます。

本日、学位記を授与されました大学院博士前期課程修了生は、工学府三百五十三名、農学府百七十六名、生物システム応用科学府六十一名、技術経営研究科四十一名、合計六百三十一名です。また博士後期課程修了生は、工学府四十七名、生物システム応用科学府十三名であり、合計六十名ですが、これに加えて二名の方に論文博士の学位が授与されております。また、茨城大学と宇都宮大学、および本学で構成しております東京農工大学大学院連合農学研究科の修了式を既に三月一五日に行い、課程博士四十二名、論文博士六名、合計四十八名の方々に博士の学位を授与しております。したがいまして、本学の博士号授与者の合計は百十八名となります。以上を合計いたしますと、今年度本学から巣立ち行く大学院修了生及び論文博士の総数は、七百四十一名となります。皆様がこれまでの研鑽と努力の結果、修士号あるいは博士号を取得されましたことに対し、我々一同、心よりお祝いを申し上げます。

本日の修了者の中には、アジアとアフリカの八カ国から四十四名の留学生が含まれております。皆さんは異なる言語、文化、習慣の壁を克服し、学位を取得されました。今日までの努力に対して深く敬意を表します。

博士号を取得された皆さん、皆さんは今日、研究者として独り立ちする日を迎えられました。おめでとうございます。これからは自力で独自のフロンティアを切り開いていかれると思います。本日、この慶びの日を迎えられた皆さんの科学者・技術者としての感覚は瑞瑞しさに満ちていると思います。予想外の結果や現象に驚き、探究心をそそられる新鮮さに満ちた科学者の目を持っております。博士論文をまとめる過程で、更なる飛躍に繋がる糸口を見つけた人もいるでしょうし、これまでの研究課題から少し離れた新たな課題をみつけ、研究者としての幅を広げようと胸を膨らませている方もいるでしょう。「研究」の「研」という文字の右側は二つの物の表面をといで高さを揃えたさまを示します。左側の石偏と組み合わせて、石の表面をといで平らにすること、転じてよごれを磨きとって本質を見極めることを意味します。「研究」の二つ目の文字「究」の字の上半分は「穴」を意味し、その下は数字の九です。この「九」は手が奥に届いて曲がったさまを表しております。つまり、「究」は穴の奥底の行き詰まる所まで探ることを意味する文字なのです。この二つの文字を組み合わせた「研究」とは、深く調べて物事の本質を明らかにすること、なのです。これは既に皆さん先刻ご承知のこととは思いますが、改めて研究の真の意味を思い起こしていただきたいと思い、紹介した次第です。皆さんがこれから取り組む研究課題のほとんどは、いくつもの要因が複雑に絡み合っているのが常といってよいでしょう。その中から本質的な部分を探り、解明することこそが研究なのです。本質的な部分を見分けることは、実は大変難しいことであり、表面的な部分に目を奪われてしまうことは少なくありません。「研究」という文字が表す真の意味を常に忘れずに、文字通りの研究に携わる本物の研究者へと成長されんことを期待しております。

修士の学位を取得された皆さん。皆さんの多くが社会人としての生活をスタートさ

れることでしょう。自ら選んだ世界で大いに活躍しようと希望に燃えていることと思います。修士課程で培った専門知識と応用能力は、農学あるいは工学の分野の技術者として十二分に活躍できるレベルにあると思います。明日からの新しいスタートにあたっては、是非高い目標を掲げて活躍していただきたいと思います。勿論、明日からは教室での授業はなくなりますが、人生において学びが終わることはありません。常に探究心を失わず、自分自身を磨いていって下さい。

引き続き大学院後期課程に進学し、より高度な専門知識を身に着け、将来の研究者を夢見て大いに胸を膨らませている方々も多数に上ります。皆さん、今の希望に満ちたその気持ちを忘れないで下さい。これから取組む博士論文は、未開の荒野に分け入り、自ら道を切り開く行為です。荒野に一本の道が切り開かれた様子を想像してみて下さい。そこには大きな喜びがあるはずです。それは研究者にだけ味わえるものです。その喜びを目指して、明日からのスタートに期待しております。

皆さんはこれから社会で活躍していく中で、確実にそれぞれの分野で指導的立場に立つ方々です。そのような皆さんにお願いしたいことが二つあります。

一つは、研究者として、技術者として、そして社会人としての高い倫理観を失わないで行動してほしいということです。上に立つ人には高い倫理観に裏打ちされた着実な努力で全体を誤り無き方向に導くことが求められます。その誠の努力こそ必ずや報われ、その先には明るい未来が待ち受けているでしょう。

二つ目は、個人のレベルからより広い立場で行動する、いわば地球市民となっていただきたい、ということです。日本の将来を考えてみましょう。日本は超高齢化社会となり、人口が大幅に減少しつつあります。人口減少とは、今の社会的枠組みを維持すること自体が困難であることを意味します。例えば今ある道路網の維持が困難となり、かなりの部分を切り捨てなければならない日本を想像してみて下さい。その深刻さは現実のことなのです。また、世界に目を転ずれば、温暖化への対応では国の利害が優先して解決の糸口が見えず、食糧不足やエネルギー不足などが深刻化するなど、地球社会の調和ある共存には大きな不安があると言わざるをえません。まさに人類の生存を左右する問題です。このような深刻な問題はまだまだ先の話と楽観できる状況ではもはやありません。では、人類の生存維持を図るためにどうすればよいでしょうか。私は日本の将来を、あるいは国際政治力学を決めるのも、結局は一人ひとりの人間が地球の将来を考えたときに、いかに行動すべきか、その意識にかかっていると思います。すなわち、地球市民としての個人の自覚に帰着すると思います。我々一人ひとりが自己中心的な思考を離れることはいうに及ばず、国家間の利害も超えて、地球市民としてグローバルに物事を判断できるようになることが必要なのです。皆さんは「生存科学」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。この二十一世紀にふさわしい新しい科学は本学で最初に提唱されたものなのです。農学と工学とを融合させ、社会科学をも取り込んで、人類の生存を危うくする二十一世紀が抱えるグローバルな課題を解決するための新しい科学の創生を狙ったものです。生存科学を生んだ本学の卒業生として、皆さんには人類の生存のためにいかに行動すべきか、総合的、俯瞰的に判断し行動する技術者となっていただきたいと思います。

終わりに、学位を取られた皆様には、これまでに修得された学識と技術を存分に活

かして活躍されますよう祈念し、東京農工大学のさらなる発展のため、同窓会活動などを通じて、ご支援くださいますようお願い申し上げます。また、留学生の皆さんには本学で身につけた知識や技術を通して、母国の発展のために大いに活躍して下さい。さらに、皆さんの母国と日本との友好の架け橋となっていただくようお願い致しまして、ここに告辞といたします。

平成二十二年三月二十五日

東京農工大学長　小畑　秀文